

## 「暮らしから建築へ」

●講演者: 富田 崇 氏

●開催日: 2023年 3月 10日

令和5年3月10日(金) JIA三重地域会の会員研修会が開催された。東海地方で活躍している建築家の“生きた”お話を聞く全4回の連続企画で今回はその最終回にあたり、自己研鑽の為に三重会が開催している「森羅万象匠塾」と兼ねた企画だった。講師は愛知県を中心に活躍されている建築家の富田崇氏で「暮らしから建築へ」が今回の講演のテーマ。名古屋芸術大学、名古屋モード学園を始め企業向けにも講師をされている人物なので、どんな話が聞けるのだろうと期待が膨らんだ。

結論から述べると、何度も建築家の講演を聞いた事はあるが、私は、今回ほど講演中に笑った経験は無い。もちろん、良い意味でこう書いている。それほどまでに富田氏の話とその人柄は、聴講者の心をつかむ内容であったのだ。

話の序盤、落ち着いた口調で、若くして事務所を立ち上げたと思うように経営が出来ず苦汁を嘗めた経験、それから十年ほどの間に携わった設計案件の紹介など、壮年期に至る紆余曲折を赤裸々に述べられた。これらの話に聴講者は少なからず共感を抱いたことだろう。40歳を目前にこれまでの人生を振り返り「10の仕事」を自身の根幹と位置付けた。「10の仕事」について、詳細は紙面の都合で割愛させて頂くが、その説明の為に会場のモニターに映されたいくつかのキーワードを見た時、私は好奇心を鷲掴みにされた。『…古墳、マルシェ、お茶』これらは一見、建築設計に直接関連は無さそうなのだが、どういう事なのか。それらについての説明が富田氏から語られると「富田崇」という人物が、建築家という肩書きで語るにはあまりにも奥行きのある深い事を感じずにはいられなかった。

「古墳は横から眺めるのが好きですね。」そう語る富田氏の表情には笑顔が浮かんでいた。我が国における建築物の寿命の

短さに比べ、古墳(日本史上、古墳時代に築造されたもの)は築造から1500年ほど経過しても、未だそこに存在している。そのことに心を惹かれると共に、良質な地盤の土地を直感的に古墳の築造地として選定した古代の人々の凄さに感動するのだそう。確かに、このような感情を抱く人もいるだろう。しかし、富田氏はそれに留まらない。片手で持てるほどの小さなブリキの缶を取り出し、氏が聴講者に見せてくれたのは、粘土で作った古墳丘の模型だった。

「好きなものを忘れたくないんです。学生の頃から記憶力が良くない。こうして、缶の中に粘土の模型を入れておけば、蓋を開けた時いつでも思い出すことが出来るでしょ。」

富田氏によれば、これは記録、氏なりの記憶の保管法なのだ。好きが高じ、夏休みの自由研究の手伝いとして、ある小学生と共に古墳へピクニックに行ったというエピソードが紹介されると、会場の所々から笑い声が上がった。

「マルシェに参加することもあります。直接お客さんと話が出来るところを作りたい。マルシェでは建物のペーパークラフトをずるんです。『マイホームが200円で建ちますよ』って言ってね。」

これらの活動をきっかけに新しい知人が増え、人間関係が広がっていくのだそう。なるほど、一見は趣味の世界なのだが、それらの活動全てがアンテナとなって、富田氏を取り囲んでいる。10の仕事の一つ一つが建築家としての仕事に集結し、建築家「富田崇」を作っているのだ。

数多くの楽しいエピソードの紹介の後、富田氏は会場の聴講者にお茶(チャイ)を振舞ってくれた。目の前に並んだ器から、手慣れた手つきで数種のスパイスを鉢に取り出し、細かく潰す。スパイスを入れた鍋の水が沸騰すると、上品な香りが会場に



お茶(チャイ)を振る舞う 富田 崇 氏

漂った。お茶の淹れ方講座も開催している富田氏、自身が講師を務める学校(建築の)で、生徒たちにお茶を振舞うこともあるのだそう。お茶は心と心を近付けるコミュニケーションツールだと氏は語る。こうして、研修会の最後は、お茶を飲みながらの談笑で和やかに締めくくられた。

「自分を取り巻く全ての事象、色々な体験が建築に繋がっていくんですよ。今日はあまり建築っぽくない話ばかりだったけれど、ちゃんと建築の仕事もしていますよ。」お茶を淹れながら語る富田氏の照れ笑いがとても印象的だった。



山本 覚康 (JIA三重)

山本一級建築士事務所